

東京海上ビルディングを愛し、その存続を願う会
活動報告
(2020.09～2022.11)



東京海上ビルディング（TMIB）を愛し、その存続を願う会

1.活動の経過

<情報の入手と状況把握>

2020年 8月 松隈氏より大宇根に東京海上ビルを再開発すると三菱地所設計から挨拶があった旨連絡があり、驚いて橋本に確認すると、橋本にはそれ以前に東京海上側から正式に挨拶があり、事務所としては「解体は非常に残念な思い」と表明、「後世に伝える記録・アーカイブの作成を願う」旨伝えたとの事。

→資料-1、対応議事録

9/30 奥村・大宇根・水野等のOBと橋本が集まって、今後どう対処するかを協議。東京海上側に詳細説明を求める事になる。

10/22 三菱地所設計と東京海上日動火災の不動産部門に会って状況を聞く。地所設計による説明の概略は以下である。

- ①老朽化し、外装のpc版打込タイルが割れたり、剥落する例があり、それが原因での事故を起こすかもしれないことを保険会社としては見過せない。
- ②地震とそれに伴う津波に現状では十分な対応ができない。改修では無理と判断。
- ③大災害発生の際、保険業務の対応が十分できないので、対応できるビルが必要。
- ④10年間、時間をかけ慎重に検討した結果であり、再考の余地はない。

更に

- ⑤保険会社は関係先が多いので、混乱が生じないように、正式に再開発を発表するまで口外しないで欲しい。

10/23 今後の対応を橋本を交えて協議する。

橋本が見せた、外壁プレキャストの打込タイルが割れたり、剥落した現場の写真の状況に驚く。それらは竹中工務店が補修し、永田（前川OB）も現場を確認したとのこと。とは言え、だから再開発という結論は承服できない。東京海上ビルは日本における超高層ビルの嚆矢であり、名建築の誉高いビルなのは紛れもない事実であることを、広く社会に訴えようという意見になった。更に

- 広場の流さんの彫刻と石、エントランスホールの壁等には、流さんの著作権があるはずなので、それを手掛かりに壊すなど言えないかという意見。
- ジャパンヘリテージの澤田悠紀さんの協力で、ヘリテージの諸氏も含め著作権での対応を検討したが、東京海上側から挨拶を受けた折、建築の著作権の難しさを考えて、前川事務所の著作権は主張しないと話したとのこと（橋本）もあり、厳しいと判断せざるを得なかった。

2021年 2/20 東京海上日動火災保険本社ビル（東京海上ビル）内部見学
皇居がよく見え、宮内庁からいまだにクレームがあるとの話に驚く

3/25 東京海上側が建替計画を正式発表

<正式発表を受け存続のための会の結成>

5/14 「東京海上ビルディング（TMIB）を愛し、その存続を願う会」を結成し、存続のための活動を行うことを決める。

発起人に前川OB全員及び協力者に声をかけ、ほぼ全員の同意を得て発起人を決める。

発起人代表 奥村圭一

→資料-2、趣意書

発起人幹事 大宇根弘司、水野統夫、橋本功、澤田悠紀

後に後藤伸一・橘川雄一・宮田多津夫及び野崎隆・大澤暁が幹事に加わる。

事務局 大宇根建築設計事務所内（後、ホームページは野崎が担当）

として発足すると共に、東京海上ビルディングへの評価や、我々の考え方に対する意見を聞き、それを活かした保存活動をするため、多くの人々の考えを文章でお寄せいただき、公表することを、最初の活動としてスタートする。

6/2 東京海上取締役 広瀬伸一社長に横山禎徳、水野統夫が直接会って計画の変更を要望するが、「取締役会の決定事項は変えられない」との繰り返しのみで終わる。

7月末 文章募集を一旦締切、建築ジャーナル社の協力を得て、年内出版を目指し編集活動に入る。

9/30 東京海上側が、新本店計画のコンセプト発表。

この日を以て、東京海上ビルディングの再開発について多くの建築家・都市計画家に意見を求めたが、原稿を寄せてくれた人は多くはなかった。

11/4 宇都宮大建築環境研の「東京海上ビル改修・建替えに伴うCO2排出量」の報告がでて、建替えと改修のCO2発生量の差に驚く。

11/15 ゲラ修正完了、印刷所入稿。

11/15 ジャパンヘリテージの発意で「丸の内人類学街歩き」を開催、丸の内地区の実態、特に地下道の異常な拡がり（多くの人が地上に出ない）と、既に多くのビルが建替られていることに驚く。丸の内・大手町は不動産屋のための街となっていた。

11/19 東京海上担当部門との話し合い、社員は愛着を持っているが、10年かけて検討した結果でもう変えられないとのこと。

11/20 ジャパン・ヘリテージ主催のシンポジウム（オンライン）に協力、

挨拶 澤田悠紀 高崎経済大学経済学部准教授

基調講演 橋本 功 前川建築設計事務所代表、本会幹事

講演 「景観に関する法規則の概要」

尾谷恒治 早稲田リーガルコモンズ法律事務所 豊島オフィス代表・弁護士

「丸の内をテーマに」

松橋達矢 日本大学文理学部教授

「東京海上ビルをテーマに」

香山壽夫 東京大学名誉教授、香山建築研究所代表

景観・都市計画や住民の有無等の問題提示、香山先生の「よい建築を残せ」の力強い一言に共感の反応が多かった。

12/17 東京海上に公開質問状提出

前川建築へ評価と全面建替の理由、SDG s 等での会社理念との不整合等を指摘し、保存再生の要望と、流政への彫刻への対応の確認を求める。

→資料-3、公開質問状

12/20 本「えっ！ホントに壊す！？東京海上ビルディング 超高層ビルさえ消耗品にしてしまっているの？」完成
執筆者・希望者及び有識者等及び東京海上及び三菱地所設計に届ける。後、この本は日本図書館協議会選定図書に指定される。

→資料4、「えっ！ホントに壊す！？東京海上ビルディング」の表紙と毎日新聞書評

12/22 記者会見を行う。建築家会館大会議室にて。
会立ち上げの説明書、公開質問状、完成した本等について説明。
今後の活動方針を説明し、発信を依頼する。
出席 朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、共同通信、日経BP、日刊建設工業新聞
日刊建設通信、建築画報、建築ジャーナル、美術出版、ブンガネット

→資料-5、建設通信の記事

2022年 1/24 東京海上側の公開質問状への回答受理

内容は建替コンセプトの繰り返しで、解体化によるCO₂の大量発生や改修での可能性チェックの内容、本社機能の過度な重視への疑問には直接答えていない。歴史的価値の継承のため学識経験者を含む委員会の設置と流・彫刻の他施設への再設置は説明あり。

→資料6、公開質問状への回答

2/16 「江戸東京を愛するちよだの会」との共催で「脱炭素につながる再開発とは」の第1回シンポジウムを共催

講師 宮田多津夫（本会幹事）

「脱炭素に向け、再開発を考え直す」

横尾昇剛（宇都宮大学教授）

「建築物の建設に起因する環境負荷としてのCO₂の排出量」

澤田悠紀（高崎経済大准教授、本会幹事）

「脱炭素につながる再開発とは・・・法と経済観点から」

大澤昭彦（東洋大学准教授）

「これまでの超高層ビル開発の動向と今後の論点」

→edotokyo.chiyoda@gmail.com参照

講師の話で再開発でのCO₂の発生量の多さと共に、区民・ちよだの会が問題にする乱暴な開発が、神宮外苑地区など余りにも多い現状に驚く。

2/18 東京海上側に回答書に対する「確認事項」を提出、回答を求める

→資料7、回答書に対する確認事項

2/23 ホームページtmiblove.comを開設。活動のお知らせ、結果報告等情報発信の要となる。これには野崎隆さんの全面的な協力がなければできなかった。

→ホームページ<https://tmiblove.com>参照

3/29 確認書に対する回答を受理

内容は、公開質問状への回答の焼き直しでしかなかった。

3/29 解体反対・存続希望の電子署名をスタート

6/17 大宇根幹事がJIA会長六鹿正治の勧めにより、元JIA会長として新海上ビルの設計者レンゾ・ピアノ氏に手紙を送る。出版した本の香山壽夫先生の文章を英訳（香山先生自身が翻訳）し、前川OBだけでなく日本の建築家の気持ちを表すものとして添付する。

→資料9、レンゾ・ピアノ氏への大宇根よりの手紙

3、レンゾ・ピアノ氏への大宇根よりの手紙及び香山先生の英文

7/27 大宇根建築設計事務所で東京海上側より、レンゾ・ピアノ氏は手紙の内容を理解の上、設計作業を進めているとの説明があった。レンゾ・ピアノ氏への手紙の直接の返事ではなかった。レンゾ・ピアノ氏には直接手紙を贈ったのだが。

8/1 東京海上側より新計画のプレス発表がされた。そのパースを見て、立面が正方形に近いずんぐりむっくりのお相撲さんのようで驚く、しかもフラットなガラスのカーテンウォールで、パースでは中が透けて見えるように描いているが、実際は西日でキラキラ眩しい感じの建物なのに更に驚く。

→資料-11、発表パースと実際に近いパースの比較

8/19 海上側の新計画に対する我々の気持ちと、どうしても現在の建物を保存改修して欲しい旨の要望書を提出する

→要望書

<活動への理解を深める活動>

本の出版への反応を踏まえ、活動への理解を深めるため、連続シンポジウム・講演会・見学会等を開催する。

●連続シンポジウムの「生活環境としての都市・まち・建築・景観を考える」

第1回 3月4日 「建築の記憶」 於：建築家会館1階ホール

パネラー 武田智行（弁護士）「人々の理想と記憶の中の建築」

松岡和子（東京医科歯科大学名誉教授・翻訳家）

「良いものは残して使い続けよう」

大宇根弘司（建築家、本会幹事）

「カチカチ山の狸の火傷色」

参加者 会場 22人 オンラインは準備中で間に合わず

第2回 4月8日 「都市とヒューマニズム」 於：建築家会館1階ホール

パネラー 伊丹勝（<元>日本設計株式会社代表）

「新宿から丸の内を見る」

鈴木伸治（横浜市立大学教授）

「都市デザイン・都市景観に建築を生かす」

小枝すみ子（江戸東京を愛するちよだの会）

「市民の立場から、都市開発の現状を問う」

参加者 会場 22人 オンライン 29人

第3回 5月13日 「残す手法は？」 於：建築家会館1階ホール

パネラー 上田令子（都議会議員）

「都市の景観・記憶財産を守るには」

神田順（東京大学名誉教授）

「東京海上ビルを残す意味—景観と構造の視点から—」

宮田多津夫（建築家、脱炭素研究者、本会幹事）

「どうすれば大事な建築を残せるのか」

参加者 会場 12人 オンライン 28人

第4回 6月10日 「昭和建築を守る価値」 於：建築家会館1階ホール

パネラー 富永譲（建築家、法政大学名誉教授）

「<建築論>の不在について」

野沢正光（JIA環境会議前議長、住宅遺産トラスト代表）

「タイトル無し」

大宇根弘司（JIA元会長、本会幹事）

「タイトル無し」

参加者 会場 20人 オンライン 79人

第5回 7月8日 「都市の記憶・建築の記憶」 於：建築家会館1階ホール

第一部

パネラー 田根剛（建築家、ATTA代表）

「都市の記憶・建築の記憶」

三井所清則（建築家、アルセッド建築研究所代表）

「BEICA賞の受賞建築から、建築の寿命について考える」

第二部 都市の記憶から「建築の命」を考える

田根剛×三井所清則×宮田多津夫×大宇根弘司

参加者 会場 35人 オンライン 73人

連続シンポジウムの記録は、野崎・大澤暁により、下記のホームページで第1回から5回
まで全部見ることができます。とても興味深い内容なので、ぜひご覧ください。また、
今後冊子にまとめる予定です。

→ホームページ<https://tmiblove.com>

●講演会の開催

4月24日 「前川建築を語る」 於：千代田区立日比谷図書文化館小ホール

講師 奥村珪一（本会代表幹事）

橋本功（本会幹事、前川事務所代表）

前川建築を読み解くデザインボキャブラリー、7つのキーワード等を説明

講演会の後、東京海上ビルを外部より見学

参加者 52名

→ホームページ<https://tmiblove.com>

5月21日 「東京海上ビルの魅力を語る」 於：前川建築設計事務所

講師 大宇根弘司（JIA元会長、本会幹事）

講演会の後、前川事務所内を見学、海上ビルのスタディ模型
等を見る。

参加者 20名

5月29日 「丸の内の建築について」 於：明治安田生命ビルB1

講師 小川格（建築の本や雑誌の編集者、

「日本の近代建築ベスト50」出版）

丸の内の建築と三菱地所との関係の歴史的考察

奥村・大宇根も加わったクロストーク

参加者 108名

→ホームページ<https://tmiblove.com>

6月24日 「建築物の変容性と社会の変容性を複数の時間スケールから

考える」 ～東京海上日動ビル保存改修計画を例として～

於：千代田区立日比谷図書文化館小ホール

講師 豊田啓介（東京大学生産技術研究所特任教授、noiz.gluon）

建築を通して社会的価値の提示を行う立場から保存改修や

再開発等に再価値化の具体的手法やデザインを提示する姿勢の重要性を指摘。

参加者 78名

→ホームページ<https://tmiblove.com>

●見学会の開催

見学会は海上側と奥村が話し合った方法によって行った。会の運営には大澤暁の努力に負うところが圧倒的に大きい。

4月24日 講演会「前川建築を語る」の後、外部見学会

参加者 45人

5月21日 前川事務所ビル見学会

参加者 20人

7月15日 東京海上ビル1階ホール及び外観見学会 13時より1回

海上側と見学会の方法の同意が得られ、以後この方法で行う。

説明員 奥村・大宇根・橋本

参加者 38人

7月16日 東京海上ビル1階ホール及び外観見学会 11時と15時の2回

説明員 奥村・大宇根・水野・橋本

参加者 43人（1回） 41人（2回）

7月20日 東京海上ビル1階ホール&外観見学会 10時の1回

説明員 奥村・大宇根・水野・橋本

参加者 41人

8月27日 東京海上ビル1階ホール及び外観見学会 10時と15時の2回

説明員 奥村・大宇根・橋本・宮田+水野

参加者 42人（1回） 41人（2回）

8月29日 東京海上ビル1階ホール&外観見学会 10時の1回

説明員 奥村・大宇根・橋本・宮田+水野

参加者 40人

6 ページ

以上、参加者合計 331名

→資料12、見学会用見どころガイド

見学会は大変好評で、毎回SNSで募集発表すると、その日の内に定員に達し、締切後も申込が続く状態であった。また、見学会後の感想も好評で、特に、当時設計に加わったOBからの説明が好評であった。

→資料13、見学会参加者の感想文（5例）

見学会に先立ち、ビルの周りでスタンディングをするという市民があり、本人がSNSに投稿した。海上側から、それなら見学会は中止との連絡があり、この申し出を本人に伝えたところ、自発的に中止されたが、SNSに対する海上側の異常と思える反応に驚く。

●解体反対の署名集め

東京海上ビルの解体中止と保存改修を求める署名を集め、東京海上側に届ける。

3月29日 電子署名をスタートする

5月20日 紙での署名集めを手分けしてスタートする。

7月20日 署名の集まりが悪い（私企業ビルへの署名へのためらい）ので
SNSで署名集めを改めて広報する

9月30日 現在 メール署名者 317名

紙媒体署名者891名 合計1,208名

11月9日 東京海上側に届け、再考を要望する。

→資料-14、紙署名用紙と提出時写真

●保存・改修のアイデア募集

東京海上ビルの保存・改修のアイデアを募集し、展示・発表する。

7月25日 アイデア募集を始める

シンポジウムの出席者の提案を生かしての募集

8月28日 募集を締め切る

アイデア案数19案

8月30日 アイデアを展示 於：前川事務所2階メモリアルルーム

8月31日 展示案の作者による発表と議論

9月17日 好評により再展示

→資料15、アイデア案の提示（1例）と新聞記事

2. 活動の結果と今後の展開を考える

<今迄の活動で確認できたこと。(現状認識)>

- 建築は、経済活動として位置づけられ、**こわして・つくる**ことが**国家としての経済のしくみ**に組み込まれている。

↑
これに行政・経済界も同調←(建築界も同調していなかったか?)
神田先生の叫び「**建築は経済のためにあるんじゃない**」は我々の気持ち。

- しかし、この「しくみ」への疑問が少しずつ生まれている。
 - ・SDGsの流れによるCO2の削減
SDGsへの対応が融資の条件になりつつある。
 - ・耐震、水害対策、設備の更新などの技術革新等により既存更新の有利さを認める流れが出始めている
霞が関ビル、新宿の超高層ビルが大規模保存改修で蘇っている。
←しかし、税制等がその流れに水を差している。建築は古くなると価値がないとする税制と今後どう戦うかが問われる。
- 国民の中に「**こわして建てての連続**」への疑問が拡がり始めている
 - ・公共建築へは解体反対の声があがり、拡がるようになった。実際、解体中止の事例が増えている。
 - ・民間建築は建主の権利と思う人の方がまだ多くて厳しいが、景観や文化財としての建築を認める人も少しずつ増えている。
- 一般の人々には、「**建築が好き**」な人が確実に増えている。
そのことは、連続シンポジウムや講演会・見学会等を通じて実感できた。しかし、建築界はそういう人達に向けて行動していない。むしろ、建築家自身が、市民との間に壁を作っていた。その結果「**建築**」は特殊な人々の者であり、一般の人は口を出せないものにしていただけなのか。

<建築を文化・記憶資産として残し、生活の中に生かしていくには、>

- 一般市民のなかに増えている「**建築が好き**」な人を**着実に増やしていく活動**を進めていく必要がある。と同時に、建築家自身が自己変革し、こうした市民と手を繋げて行動することが求められている。
- 国民の中に芽生え始めた「**壊して建てる**」への疑問に**本気で応えていく活動**をし、この新しい流れが主流となるような努力が必要である。
- こうした活動には、SDGsの流れ等、環境問題の視点や活動と提携した大きな運動へと視野を拡げていくことが大切になっていく。

<今回の反省とこれからの活動の方向>

- 今回の活動は、スタートで出遅れたことや、私企業の本社ビル（公共建築でない）への対応ということで、「我々はなぜこの活動をするのか」という原点の確認に時間をかけすぎたかもしれない。
しかし、本の出版・連続シンポジウムや講演会・見学会等で示された、現在の状況に対する人々の不満や、憤り、この活動に対する共感を考えると、**もっと激しい（暴力的ということではなく）活動**をすべきだったかもしれない。
(ex) みずほFGや三菱UFJFGの株主総会で環境NGOが1株株主となっていた提案が否決はされたが、34.5%の賛成を得、企業にショックを与えている
- これからは、他の組織や個人と手を組みながら、**市民の間に芽生えている建築への関心、愛着を誘導する活動**を盛んにし、彼らを活動の仲間として位置づけた活動にしていくべきである。
- こうした一般市民との協力体制づくりには、**ホームページやSNSの活用**がいかに有効かを理解できたことも、今後の活動のために、貴重な財産となると思われる。
もちろん、これらの活用が持っている問題点を理解した上での活用方法を、今後考えねばならないことも少しずつ分かってきたことではある。
(ex) 1日で埋まる見学希望者の内、見学会の後、署名をしてくれる人は2割強、多くても3割はなかなか超えない。
(ex) 署名簿集のSNSを見る人の内、実際に署名する人は5%位しかない。しかし、見ている人が非常に多いことも事実である。